共生とは出会いつづけること

笹原　恵

中島みゆきの「二隻（にそう）の舟」という歌がある※1。

おまえとわたしは　たとえば二隻の舟
暗い海を渡ってゆくひとつひとつの舟
互いの姿は波に隔てられても
同じ歌を歌いながらゆく二隻の舟

人生はよく航海にたとえられるが、結婚とは、二隻の舟に乗り込むことではなく、やはり二隻の舟が共に航海をしていくというイメージの方が似つかわしいように思う。一人ひとりが固有の生命をもち、自分の人生を生きるというそのことから、やはり一人ひとりが一隻の舟であるというイメージがわたしにはぴったりくる。そしてこの歌は、結婚という形に限定されない「おまえ」と「わたし」の関係をうたっている。「おまえ」と「わたし」は恋人でも、友人、同志（仲間）でもいいし、親子でもいい。要するに、同時代に航海するすべての人が「おまえ」になりうる。

座談を読み、改めて結婚することやライフスタイルについて、また「共生」について考えていたら、この歌が浮かんだ。

結婚するかしないか、それが早いか遅いか、子どもをもつかもたないか、「きちんとした」仕事に就くか就かないか、簡単に二分されがちな選択肢そのものに目を奪われていると、その背後にある、それぞれの生き方や考え方、感じ方がみえなくなってしまうと思う。どのような選択肢を選んだのかではなく、なぜその道を選んだのか、それぞれがどう生きているのか、が問われるべきではないだろうか。

男女共同参画とは、そんなわたしたちの生き方の内実を問うものとしてある。結婚時の女性の改姓は当然だが、男性の改姓は「婿養子になること」で抵抗がある※2というのはスポーツの「ルール」と同様に公正だというのか。なぜ結婚・子育てと仕事との両立に悩むのはいつも女性で、男性ではないのか。なぜ女性は「自分のために働く」といい、男性は「家族のために働いている」というのか。結婚は、ストライク3個でアウトになる野球とは違い、女性と男性に違ったルールを強要する。しかし女性と男性に割り振られたルールが違うことに気がつかないほど、性別役割分業と女性の人権を軽んずる思想は根深くわたしたちの中にある。

女性の非婚者を意味する「負け犬」という言葉が流行語となったのも決して偶然ではない※3。「勝ち」とか「負け」ではなく、誰が、何を「勝ち」と呼び、何を「負け」と呼んでいるのかをしっかりと見極めることからはじめたい。「勝ち」と「負け」を躊躇なくわけることの傲慢さに対し、他者の生き方にずかずかと踏み込んで「勝ち負け」を宣言するその図々しさに対し、怒ることからはじめたい。結婚は女性にとっても、また男性にとっても一つの選択肢でしかないにもかかわらず、特に女性がシングルでいることが「負け」とされるのは、女性に「結婚すること」＝「勝ち」という価値観を押しつけ、結婚制度に誘導するためにほかならない。シングル（ひとり）でいることの自由が保障されない社会は、パートナーを選ぶ自由も保障されない社会であるし、他者の選択に対して不寛容な、つまり多様性を認めない社会である。

結婚していれば、また子どもや家族がいれば「共生」しているというわけでもないし、シングルが他者と「共生」していないというわけでもない。誰と暮らすかではなく、他者と「どのように」関わるのかが重要なのだと思う。わたしたちは身近にいる人た

笹原恵（ささはらめぐみ）

1963年宮城県仙台市出身。静岡大学情報学部助教授（社会学・女性学）。磐田市男女共同参画推進懇話会委員、沼津市男女共生プラン推進委員会委員なども務めている。最近は特にセクシュアリティの問題と幼児期のジェンダー形成過程に関心を持っている。

ちときちんと「出会って」いるだろうか。そしてまだ出会っていない人々ときちんと向きあう用意ができているだろうか。深いところで自分を支え続けてくれた多くの人たちと「出会う」とき、わたしたちは初めて自分にも「出会う」ことができる。

「結婚によって自分のライフスタイルが崩れてしまう」「自分を犠牲にしてまで子育てをしたくない」という言葉に違和を感ずるのは、結婚しない・子どもを持たないというライフスタイルの選択に対してではなく、他者との「出会い」の意味に気づいていないことへの違和である。わたしたちは出会いによってつくられてきたといえるし、その出会いの分だけしか自分をつくってきていない。ひとは独りで生きることはできない。

最後に、わたしがもっとも好きな「二隻の舟」の後半のフレーズを紹介したい。

敢えなくわたしが波に砕ける日には
どこかでおまえの舟がかすかにきしむだろう
それだけのことでわたしは海をゆけるよ
たとえ舫(もや)い綱は切れて嵐に飲まれても

共に生きるとはこのようなことなのではないだろうか。わたしの危機に、わたしの苦しみ悲しみに、心をふるわせ、また体をふるわせてくれる人たちがいる、そしてその人たちの喜びや苦しみ、悲しみを共有するわたしがいる。

きこえてくるよ　どんな時も
おまえの悲鳴が胸にきこえてくるよ
越えてゆけと叫ぶ声が　ゆくてを照らす

越えてゆけという声に背を押されながら、また越えてゆけという声を発しながら、出会い続けていくことが、「共生」だと、わたしは思う。

※1　「二隻の舟」は、中島みゆきのCDアルバム『EAST　ASIA』（ヤマハミュージック　コミュニケーションズ　YCCW-00023　2001年）所収。ぜひお聞きください。

※2　現行民法には、「夫婦は、婚姻の際に定めるところに従い、夫又は妻の氏を称する」（第750条）とあり、これが夫婦同氏の根拠となっている。しかし「妻の氏」を選ぶことイコール「婿養子」ではないことに注意（同様に「夫の氏」を選ぶことも「嫁入り」ではない）。「婿養子」とはかつて旧民法の規定にあった「夫が妻の家に入る」制度であり、婚姻と同時に夫が妻の親と養子縁組をするという、家督相続と連動した制度である（旧民法では、結婚は「妻が夫の家に入る」ものとされていた）。

現在でも、結婚時に妻の親との養子縁組をすることはできるし、それを「婿養子」と称することはあるが、これは制度としての「婿養子」ではない。

※3　酒井順子『負け犬の遠吠え』講談社、2003年。たぶん著者自身は結婚についてのプレッシャーをかけてくる社会に対する「やり過ごし」の「処世術」として戦略的に「負け犬」という言葉を用いているのだろう。しかし「負け犬」が流行語となった背景には「勝ち組」「負け組」と何事も二分しがちな世論と、女性シングルへの偏見に満ちたまなざしがある。他方、岩下久美子は「おひとりさま」という言葉を提言し、自立した女性の意義を主張しているが、これは一人ひとりが二隻の舟というイメージと重なるものがある（岩下久美子『おひとりさま』、中央公論新社、2001年）。
「おひとりさま向上委員会」HP参照
http://ohitorisama.net/ohitorisama/contents/iwashita.html

二隻の舟　作詞・作曲　中島みゆき

©1989 by YAMAHA MUSIC FOUNDATION
All Rights Reserved. International Copyright Secured.
財団法人ヤマハ音楽振興会　出版許諾番号　05174P（この楽曲の出版物使用は、（財）ヤマハ音楽振興会が許諾しています。）

静岡県生活・文化部男女共同参画室からのお知らせです

しずおか女性「チャレンジ・サイト」オープン！

10月～

チャレンジ支援とは

『女性のチャレンジが社会の活気・男性の元気を創出します』

少子高齢化が進展する中、男性も女性も共に生きがいをもって充実した暮らしができるような社会づくりが必要です。しかし、今、女性の能力は、社会で十分に生かされているとはいえません。

意欲と能力のある女性が社会で活躍し、男性もゆとりのある生き方を目指す、暮らしの構造改革の実現が、活力ある地域社会を創出します。

県では、就業や起業、地域活動など県民の様々なチャレンジを促進するため、県域民間団体で構成する「しずおか男女共同参画推進会議」を核に、国や県、市町等の関係機関のサポートを得ながら、県男女共同参画センター「あざれあ」を拠点にチャレンジしたい人を支援します。

●チャレンジサイト・トップページ

http://azarea.pref.shizuoka.jp/challenge/index.html

チャレンジ・サイト

支援情報や活躍事例を紹介します

チャレンジ・サイトでは、“チャレンジしたい”と考えるあなたが必要とする情報を、効率的に入手することができるように、各種支援機関がそれぞれ持っている再就職やキャリアアップ、起業、地域活動など様々な分野にわたる情報を、一元的に紹介しています。また、県内の各地域で活躍している方々の素晴らしい取組事例も、成功に至るまでの経過と共に紹介しています。さらに、あなたのチャレンジ経験や、現在、新たな分野に取り組んでいるという活動内容なども募集しています！

NETWORK

仕事を求めている人、再就職したい人、年齢やキャリアにあった仕事を見つけたい人、職場環境をよくしたい人などをサポートします。

NPOについて知りたい人、NPOの設立を考えている人、社会福祉に協力したい人、ボランティア活動に参加したいと考えている人、国際交流活動をしたい人に向けて、さまざまな情報を紹介しています。

高度なスキルや専門知識を身につけたい人、キャリア形成をめざす人を幅広くサポート。能力開発や各種教育、生涯学習に関連するさまざまな講座や情報を紹介しています。

農林水産分野で働きたい人、起業したい人、経営や技術の高度化を図りたい人をサポート。研修・講座の実施、情報を発信しています。

チャレンジに関連した情報を紹介しています。

起業とは?自分に起業は可能?どうすれば起業できるのか?などの疑問に応え、起業条件の整備や融資相談など、実現に向けたサポートを行います。

急に子供を預けたい時のサポートから、仕事と子育ての両立に関する情報、介護支援の情報、子育て、介護全般に関する相談など、多くの情報を紹介しています。

起業にチャレンジ!

安藤絵里
(静岡市)
安藤絵里FP事務所代表　(ファイナンシャルプランナー)

金融の自由化、ペイオフなどの流れの中で、個人や家庭における金銭管理の責任が問われる現代。安藤さんは、このような時代を先取りし、資産家向けになりがちなこの仕事を普通の家庭に着目し、お金に関する相談業務を行うため起業しました。FPのプロを目指し各種資格の取得にチャレンジし「相談者の立場に立ったきめ細かな相談サービス」を志し活動しています。なかでも、力を入れているのは、子ども向けの金銭教育。「親子で楽しむおこづかいゲーム」「夏休み親子消費者教室」などの講座を開催しています。FPの存在や役割を多くの方に知ってもらいたいと広報活動中。

平成 3年
銀行の保証会社に入社したが、バブル景気の中、個人や家庭の資金計画の必要性を強く感じ、独立系ファイナンシャルプランニング会社に転職。

平成10年～15年
プロを目指し、ファイナンシャルプランナーのCFP資格、DC(確定拠出年金)プランナー資格、1級ファイナンシャルプランナー資格等様々な資格を取得。

平成 15年
自分がやりたい相談者サイドに立ったきめ細かな仕事をめざし、独立し、起業することを決心。

現在
この仕事の存在、役割を知ってもらう広報活動や公的な場でのアドバイザー、子ども向けの金銭教育など、幅広く活躍中。

「親子で楽しむおこづかいゲーム」

Voice 読者の声

46号「探訪・団塊の世代」を読んで

私も団塊の世代です。私の大学でも学生運動がすごく、研究室にも投石され、機械が壊されてしまったことを、「ねっとわぁく」を読みながら懐かしく思い出しました。隅から隅までしっかりと読ませていただきました。読んでいて夢中になれたのは、企画、内容が良かったからだと思います。編集スタッフの皆さん、がんばってください!

（富士宮市　よっちゃんさん）

"団塊の世代"小生もこの世代で、各分野で活躍される方の話を、自分の越し方とダブらせ面白く拝読しました。

（駿東郡　穴見貴幸さん）

とっても楽しく拝読。男女共同参画社会に対する理解度も予想していたより遥かに進んでいるお考えに感心しました。理解はしていても実行が伴わないのがこの社会を遅らせているのでしょう。この「ねっとわぁく」を拝読しながら男女共同参画社会への実現パワーが沸いてきました。

（徳島市　岩見美智子さん）

47号のご感想をお寄せください。

本号のハサミ込みハガキ、またはE−mail、FAXでも結構です。
抽選で美術館招待券などを差し上げます。

post card or mail or fax

E−mail:kouryuukaigi@ka.tnc.ne.jp　FAX 054-251-5085

編集後記

人それぞれの違った意見が聞けて、自分自身も再発見でき、語り合うことの大切さを知りました。（朝倉一樹）

編集に初めて携わりましたが、メンバーに恵まれて楽しく、様々な発見もあって勉強になりました!（小泉孝之）

20年ぶりの「ねっとわぁく」再登板です。改革が叫ばれる今、ジェンダー改革も進むことを期待します。

（齋藤典子）

仕事以外のことに初挑戦。いろいろな人生に出会い、学びました。編集って、奥が深い。感謝です。（坂倉裕子）

はじめてのことばかりで、戸惑いの連続でした。次号では、戦力になりたいです。（鈴木麻里子）

ひとつの物を創るには、多くの人の協力が必要です。自分の力不足を実感しつつ、次号に生かします。

（村田美千子）

編集スタッフ
齋藤典子（編集長）
朝倉一樹（大学生）
坂倉裕子（研修講師）
鈴木麻里子（大学生）
村田美千子（団体職員）
小泉孝之（交流会議常任委員）
木村幸男（アドバイザー）

ねっとわぁく vol.47

監修・発行／静岡県男女共同参画センター
発　行　日／平成17年10月1日
住　　所／〒422-8063
静岡市駿河区馬淵1丁目17−1
TEL／054-250-8107　FAX／054-255-9266
企画・編集／静岡県男女共同参画センター交流会議

富国有徳　創知協働　しずおかの挑戦。

「ねっとわぁく」は年2回発行（3月、10月）します。
県民生活センター、県内男女共同参画センター、市町役場、公民館、公立図書館、文化会館などで配布しています。